京都大学	博士（　　文学　　）	氏名	安井　大輔
論文題目	現代日本社会の多文化接触領域におけるエスニシティ生成過程の研究 ―横浜市鶴見区にみられる沖縄移民の文化実践を事例にして―		

（論文内容の要旨）

本研究の対象は、沖縄から日本本土へ渡った本土沖縄移民と、沖縄から南米各地に移住した経験を経てのちに本人または子孫が日本に帰還した南米帰還移民、そして彼らと関係をもつ非沖縄系の出自を持つ「日本人」となる。本研究は、横浜市鶴見区に居住する彼ら集団をエスニック・マイノリティとしてとらえ彼らのエスニックな文化実践に焦点を当て、集団内外の多様化によって変容するとともに自分たちらしさを保持しようとする、エスニシティをめぐるベクトルの交錯を検討する。

本研究は序章・第1章～第6章・終章の全8章からなる。

序章では、本研究の問題が設定される。1990年代以降、世界各地の沖縄移民コミュニティが活性化され、2000年代から故郷沖縄の伝統文化と移住地における文化とが混じり合った文化現象が報告されるようになった。沖縄文化として表出されるエイサー（沖縄の民俗舞踊）や言語、音楽、料理といった文化はかつて差別のための指標となった文化要素だった一方で、現在は多くの人に好まれる文化となっている。こうした沖縄文化復興の背景には、沖縄移民をめぐる共通した状況変化がある。それは、エスニック集団と外部社会の非対称的な関係の変化（集団間の変化）と、集団成員の世代交代と格差拡大による変化（集団内の変化）である。集団の外部と内部において多様化する沖縄移民たちが、いかにして沖縄文化・沖縄らしさ（オキナワネス）を変容させるとともに自集団を担保しているのかが本研究の問題となる。沖縄移民たちの実践する文化現象は、異種混淆としてだけでなく伝統的で「純粋な」文化としても生起している。文化は実体として変化し続けているにもかかわらず、不変で一貫したものと強調されているのである。本研究は、この文化の現れ方を開放性と恒常性というエスニシティのもつベクトルの交錯としてとらえ、沖縄移民のエスニシティ生成過程を分析する。

第1章では、恒常性と開放性をめぐる文化理論の展開を提示して、そこから二つの分析課題を設定する。現代世界の多文化化は主に二つの理論によって論じられてきた。その一つ文化本質主義の立場は、文化的差異をエスニック集団に固有・不変の集合的存在としてとらえ、全体社会を構成する要素として積極的に認められること（差異の承認）を要求する。この多文化主義の立場は、エスニック・マイノリティの権利を擁護するものの、集団の文化的差異を固定化させ、集団から逸脱する存在や実践を捨象してしまう限界を抱えている。もう一つの文化脱本質主義の立場では、文化的差異を混淆し、絶えず変容する存在としてとらえ、文化の混血性、雑種性（ハイブリディティ）を積極的に評価する。この立場は、多文化化する社会において、差異の創造や創意を可能にするものの、差異の持続性を等閑視してしまい、現実社会で差異のもたらす抑圧や不平等の暴力から乖離してしまう傾向がある。エスニックな文化現象において、前者の立場は、集合的アイデンティティの核となる恒常性に、後者の立場は、混交し変化が生じる文化の周縁領域に関わる開放性を指す。現代のエスニック集団は、多文化主義が主眼とする集団間の差異の承認を進める多文化・化と、脱本質主義が主眼とする集団内部の多様化を進める多・文化化を求められているが、両者はいかにして接合されうるのか。この文化理論的な問いを具体的実践から検討することが、本研究の第一の課題である。第二の課題は日本社会におけるエスニック集団の地位の向上と自文化の継承である。日本のエスニック・マイノリティは社会的に地位向上をはかるため日本社会への同化とエスニック文化の継承を両立する必要がある。マジョリティによって受容される開放性と自分たちらしさを示す文化的恒常性の両立は

いかにして可能なのか。このエスニック集団が直面する状況を問うことが本研究の第二の課題である。

第2章では、本研究の具体的な調査地である横浜市鶴見区における沖縄移民コミュニティが形成される過程を示す。この地域は、京浜工業地帯の中核として大量の低賃金労働者を必要とし、大日本帝国の周縁各地域からの出稼ぎ民を吸収する多文化接触領域だった。戦前に職を求めて沖縄から鶴見に移動した大量の移民たちは差別と偏見のなかで、同郷者による職業と住居の斡旋ネットワークをもとに、集住地域を形成していった。彼らのほとんどが第二次産業の下請け工場で働く肉体労働者であり、彼らの生活・労働世界は、地縁や血縁に基づくものであり、彼ら集団は同質性の高いコミュニティとして形成された。

第3章では、戦後の沖縄コミュニティが多様化する過程を示す。鶴見区には戦後も沖縄からの本土就職者、沖縄から南米へ移住したのちにデカセギにより来日した南米帰還移民、日本人配偶者の移住や、世代交代にともなう職業や階層の分化により多様なメンバーを含むこととなった。鶴見区のオキナワネスは、それまでにあった地縁・血縁の原理だけでなく、沖縄語（ウチナーグチ）やかつての習慣、といった要素をも含むように定義が複数化されることで集団の外延を柔軟なものにし開放性を高めていった。ただし新しいメンバーの属性によっては彼・彼女たちはあくまでも周辺的なメンバーとして扱われており、オキナワネスの拡張は内部の多様なメンバーを序列化し、「沖縄」をめぐる正統性の競合を生じさせてもいた。

第4章では、エスニック組織としての鶴見沖縄県人会を対象に、県人会を構成する人びとの属性と「沖縄」集団に参加するためのメンバーシップ要件を整理する。戦前に沖縄移民の村落単位の相互扶助組織の連合として結成された県人会は、戦後の沖縄移民の生活環境の変化によって、相互扶助を行ないつつも「沖縄文化」を表出する組織へと変わっていった。その過程で、県人会は、沖縄移民のための相互扶助組織という伝統的な共同体原理の維持と、南米帰還移民や沖縄の出自をもたない日本人といった多様な他者の組み込みを両立させる必要が生まれた。そのため、現在の県人会は、下部組織である郷友会レベルでは非沖縄移民を加入可能にし組織の成員を拡張しながらも、上部組織である県人会レベルでは沖縄出身者に限定する二重構造をとっている。南米帰還移民は、会員間の相互扶助を目的とした郷友会の会員となり、模合（頼母子講）に参加し生活の安定をはかることができる。本章では、鶴見沖縄県人会を対象に、集団として多様性を含むことができるように外延を柔軟化させながらも外延の明確な共同体意識を保つ、エスニック組織の恒常性と開放性の接合を明らかにした。

第5章では、エスニック行事として鶴見区において開催されている角力（沖縄の格闘技）大会とエイサーを対象に、オキナワネスの競合および継承を観察する。鶴見の本土沖縄移民のあいだでのみ行われていた角力大会は、参加者の減少から1990年代から参加者を非沖縄系日本人・沖縄系南米移民・外国人まで拡大することで、行事の存続がはかられるようになった。また沖縄移民コミュニティでは実施されていなかったエイサーは、非沖縄出身者が多数を占めるサークル団体によって実施されるようになり、女性が太鼓を叩き子どもも参加できる形式とすることで、多数の演者を擁する大規模な行事となった。ただし角力大会において外国人参加者が多数を占める現状から中止を求める意見や、青年男子が行うものとする「本場の沖縄」のエイサー団体からの批判があるように、彼らの文化実践は真正性を問われている。そのために彼らの文化実践は「沖縄」の文化であり、かつ「鶴見」の行事でもあると二重に定義をもつ。伝統文化の真正・非真正とは別次元の、生活世界に基づく真正性を併用することで、沖縄の「伝統」とつながりつつも出自にとらわれないメンバー確保を両立させる実践を可能としている。本章では、開放性を示す行事として機能する一方で、それまでと異なる新しい恒常性を作り上げていくエスニック行事の役割を明らかにした。

第6章では、エスニックフードとして鶴見区における沖縄移民たちの食事経験や彼

らの経営する沖縄料理や南米料理のレストランを対象に、食におけるオキナワネスのイメージ戦略と消費文化化を考察する。このエスニックレストランは「沖縄イメージ」を発信する必要から変容していった。それは、外部の客の嗜好に合わせて料理の味付けを変え、メニューを多言語で表記し、従業員の出身地域が多くの国・地域に分散する多様化の過程、すなわちエスニックフードにおけるオキナワネスの開放性を高めていく過程であった。この変容の過程で、かつて本土沖縄移民一世に限定されていたエスニックフードは、コミュニティ外部に対してオキナワネスの開放性を象徴する文化となった。一方で、味付けや調理法は沖縄県で作られる伝統的な製法からは逸脱したものとなっている。ただしその変容が全面的に押し出された料理は受け入れられず、「本場の味」を演出された料理を好む実態がみられた。つまり、エスニックフードは実体としての変化と同時に、イメージとしての「伝統」を自己言及的に新しくつくり出してもいるのだ。沖縄コミュニティのエスニックフードは外部への開放過程において、恒常性が再帰的に構成されている。本章では、多様なアクターに受容されるようハイブリッドでありつつ真正性の基準として恒常性が求められる多文化接触領域のエスニック食の役割を明らかにした。

終章では、第1章から第6章までの内容から、集団内外の多様化にともなうエスニック集団の変化、エスニック文化の継承という課題に答える。本研究の事例では、南米帰還移民の流入や世代交代によってオキナワネスが拡張され、地縁・血縁に加えて「沖縄」的慣習や古い言語の保持など「沖縄」を担保する要素が拡大された。結果、エスニック集団と外部社会の境界は流動化し開放的になった。一方で、かつての集団に自然に備わっていた均質性にともなう凝集力の低下に対し、結節点として沖縄らしさを表す「恒常性」が再帰的に構成された。この現象は非「沖縄」集団となり得るエスニック集団を「沖縄」として取り込み、同時に「沖縄」集団としての差異を維持するための方法であった。つまり鶴見の沖縄コミュニティは、オキナワネスを担保する対象を拡大的に再解釈することで、文化境界を維持しながらも、多様なメンバーをエスニック集団に組み込み、集団内外の多様化を接合させてきたのだ。これは同時に、恒常的ではあるが日本社会において消費可能な「沖縄」イメージの産出でもあった。自分たちの文化を商品としての消費文化にする文化のブンカ化は、集団がマジョリティの文化に同化することなく自文化を継続するためのエスニック集団の戦略であり、外部社会の変化に対応した消極的選択であった。その結果、自分たちのイメージが改善され集団としての文化の継承が可能となったのだ。

文化の多元性・多様性が保証され、文化の開放がより促進されるための装置として、恒常性が求められる。同時に、安定した集団アイデンティティが保証され、恒常性がより促進されるための装置として、開放性・多元性・多様性が求められる。本研究では、多文化化が進展することで、個々の文化集団の恒常性を具現する装置として、エスニシティが編成され再強化されるという、エスニシティの開放性と恒常性の相乗的な関係が確認された。

（論文審査の結果の要旨）

本研究は、現代世界における紛争・対立、共存・協同を規定する主要な要因であるエスニシティの動態に関して、横浜市鶴見地区の沖縄人コミュニティをフィールドにモデル化の実験を試みた野心的な社会学的論考である。本研究が対象とする鶴見地区は、異質化する現代日本社会の代表的空間である。すなわち鶴見地区は、戦前、沖縄、朝鮮をはじめ大日本帝国の周縁部から多くの低賃金肉体労働者が流入し、敗戦後も米軍統治下の沖縄からの移民流入が継続した地域である。１９９０年の出入国管理法改正以降は、沖縄から南米に移住した人々（およびその子孫）が帰還移民として大量に定着し、それに加えて、多様な出自をもつ配偶者とその子孫たちが流入したため、鶴見地区の多文化化は急激に進行していった。本研究は、このような鶴見地区をとりあげ、多文化化する現代社会における相互作用と相互変容を読み解く枠組として田中雅一らによって提唱された「文化接触域」（cultural contact zone）に関する興味深い実験的モノグラフとして位置づけられる。

２０世紀後半に出現した「エスニシティ」研究は、これまでさまざまな二分法の枠組をつくり出し、研究をその線上に位置づけてきた。たとえば１９６０年代においては、エスニシティは近代的社会変化に対する「適応装置」か「阻害物」か、という議論（M.Banton, C.Geertz）が支配的であったし、１９６０年代末から１９７０年代には、エスニックな境界における「客観的」「主観的」論争（F.Barth）がエスニシティ研究の中心になった。１９７０年代から８０年代にかけては、エスニシティの性格論争、すなわちエスニシティの本質は道具性か表出性（A.Cohen）・原初性(H.R.Isaacs)か、について多くの研究が生み出された。１９９０年代以降になると、社会構築主義の影響を強く受けて、虚構性や脱境界性・異種混淆性を現代エスニシティの基本的特性として捉える見方は主流となった。しかし今世紀にはいると、エスニシティ研究のなかに、こうした社会構築主義を、現実と乖離した行き過ぎた思弁ゲームとして批判し、人々のあいだに共同性・連帯を保障する確固とした資源として再定位する動きも登場しはじめる。

本研究の理論的な貢献は、こうしたエスニシティ研究の半世紀におよぶ展開を丹念に検討しながら、共同性・連帯を保障する「真正性」の次元と、構築的で状況に対応して自在に変容する「可塑性」の次元を接合させる新しい枠組を説得的に提示した点である。本研究においては、前者を「恒常性」、後者を「開放性」と定式化し、第一章においてその中身についての詳細な検討を試みている。さらにこの両者が、歴史的にどのように成立してきたかについて、沖縄からの移住者の生活史に密着することによって、歴史民族誌的考察を加えている。

本研究の第四章および第五章においては、この二つの相異なる方向性をもつエスニシティの性質の錯綜した相互作用について、ミクロで実証的な分析がなされた。四章では「恒常性」のなかに「開放性」を潜入させることによって両者を併存させる過程が考察される。それは、沖縄出自を厳格に適応する伝統的同郷組織としての「県人会」の下部に、日本語が話せない南米帰還移民や本土生まれの日本人などの「よそ者」を包摂する「郷友会」を組み込むことによって可能になった。上部組織における「伝統的共同性」の確認と、下部組織における「状況的共同性」の拡張は、彼らの意味世界のなかで矛盾なく両立されているのである。つづく第五章では、逆に、「開放性」のなかで「恒常性」を特権化させることによって、両者を並立させる試みが分析の対象とされた。沖縄出身者の共属感情を喚起させる伝統的なエスニック文化としての、エイサー踊りや沖縄角力といったイベントの場は、近年、文化的出自を超越した地域イベントとして地域社会に定着しつつある。本土出身者によるエイサーサークルの参加や、中国やモンゴル出身者の相撲参加は常態化

している。この過程で、真正な沖縄文化から逸脱した実践（たとえば女性の太鼓打など）も受容されてきた。しかしながら、一方で、伝統文化の真正性の尊重へのつよい要請や「真正」な文化実践への高い価値付与（たとえば沖縄出身者限定で伝統的型重視のサークルへの優先権提供）を行うことで、「恒常性」の回復をはかる仕組みを作り上げている。

本研究のエッセンスである「恒常性」と「開放性」の絡み合い（entanglement）を正面からとりあげて考察したのが第六章である。そのために本研究がとりあげたのが「食」の領域だ。エスニックフードが、それを生み出した民族共同体の帰属を強力に確認する道具として機能することは、すでに多くの研究が蓄積されている。しかし同時に、エスニックフードは異なる食文化と（とりわけホスト社会の食文化と）容易に混淆しローカル化したり、出自の主張を喪失して「無国籍」化したりする特性をもっている。本章は鶴見地区において、沖縄、ブラジル（南米）、日本の食文化要素が接合し混淆したり、相互に棲み分けたり排斥したりする重層的な過程を、ホームランドでの調査成果と結びつけながら緻密な分析を加えている。「恒常性」と「開放性」の絡み合いをもっとも実証的に示した本章は、本研究の精華といってよいだろう。

とはいえ本論に問題がないわけではない。まず「恒常性」と「開放性」という現代エスニシティの分析枠組が、本研究でとりあげる事例を超えてどれほど汎用性をもったモデルであるのかについての具体的な検証が十分ではない。それに関連して、両者の「絡み合い」を考察する領域として「食」文化以外の可能性が想定されていない点も、一般モデルの構築としては問題が残る。さらに「食」の検討が、レストランなどの市場（外食）化された場面に限定されており、日常食や儀礼食など、それ以外の多様な食実践の中身とエスニシティとの関連を検討していない点も不満が残る。しかし、こうした弱点も本論の意義を大きく損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2014年7月28日、調査委員３名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。